

## 子どもと保育の情景 (1)

「ひとり」と

「みんな」の

はざまを漂う時間とき

戸田雅美

はじめに

今回から「子どもと保育の情景」と題して、小さな連載をさせていただくことになった。

私は、ほんの少しだけ、幼稚園で担任をしていたこともあって、大学で仕事をするようになった現在でも、保育実践の現場に行ったり、実践事例をもち寄つての研究会に参加する機会に恵まれている。そのような場では、

研究者が保育者に指導的にかかわることが期待されているのかもしれないが、私は、保育の場面や事例について、現場の保育者の助けを借りて、共に考えてきた。そこで対話する中で考えたことが、時には、保育者が次の保育を創造する手がかりとなり、私にとっては、研究の源となっている。保育の場に立ち上がった問題に、どのような考察が行いうるのかを、できる限り丁寧に記述するような研究をしたいと考えているからである。

けれども、私の研究的な関心から大切にしたいと考え、その時々「子どもと保育の情景」も、まとめる余裕のないまま、いつの間にか、私の個人的なノートの中に埋もれてしまうことが気になっていた。せっかく、保育研究の源ともいえるさまざまな出来事に、立ち合いながら、十分に生かせていないのではないか。

このような思いから、私は、この連載の場を借りることとした。私にとつては、まだ研究としての形には熟さないかもしれないが、もう一度、自身の考察を深める機会にしたい。そして、この小さな連載が、ひとつの手がかりとなつて、別の見方が生まれ、別の観点からの保育研究や保育実践が生まれたらどんなにすばらしいことだろうと。さらに、保育についての考えが、いつも今を生きる子どもたちと、その子どもたちとともに暮らす大人とが創り出す保育に、その源をもつことを確かめられたら……など。新たな期待も膨らんできた。

最近、保育の制度上の変化がめまぐるしい。保育者と話をしても、子どもの話をする余裕がないという嘆きが、冗談ではなく聞かれる。そんな流れに対するささ

やかなレジスタンスの意味もこめて「子どもと保育の情景」を確かめてみたい。

### 「ひとり」と「みんな」のはざまを漂う時間とき

幼稚園の三歳児の四月の終わりのこと。四月に入園したばかりの三歳児たちは、登園した時に母親と別れるのが悲しくて泣く子どももいれば、元気に保育室に駆け込んできては、かばんをしまったままウレタン積み木を並べている子どももいた。

しばらくすると、それぞれの子どもが自分のやりたいことを見つけて遊び始めた。しかし、遊びはそれほど長続きはせず、他の場所に移つてみたり、その途中でボールの取り合いになつたりと、担任も落ち着かない動きを余儀なくされていた。

保育室から見える小さなホールに、子どもの腰の高さほどの台があった。しゅんは、その台を見つけたところに登るとそこから飛び降りた。それを見つけた担任は、台を少し動かして場所を広げ、着地するところにマットを敷いて、しゅんが飛び降りるのを笑顔で見ている。

なしゅんと担任の楽しそうな様子が魅力的に見えたのか、もみじとえまが次々と台に登ろうとやってきた。

しばらくすると、担任はまた他の場所のトラブルに呼ばれて、この飛び降り遊びの場を離れることになったが、私は、その台の近くにとどまっていた。この幼稚園で保育を見ることは、それまでも何回もあったが、この三歳児たちとは初めて会ったので、なるべく気にならないような距離をおいて、でも私という「大人」の存在が近くにあることで、担任がいなくなっても、子どもたちがこの遊びに落ち着いていられるようにと、考えながら見ていた。

三人は、そんな私の存在にはまったく気づかないように、楽しそうに順番に台を飛び降りることを繰り返していた。順番に飛び降りているのだから、それぞれ他の子どもの存在に気づいてはいるのだろうが、顔を見合わせることもなく、すっかり自分の世界という感じで、もくもくと登っては飛び降りている。台の高さがちょうどよく少しスリルがある感じで、飛び降りることそのものが楽しいのかなと思いついて見ていると、唐突に、しゅん

がマットに飛び降りたその姿勢

のまま、「はん

こ」という。そ

の言葉が私に向

けられたものな

のか、その言葉

の意味はなんだ

るう？ まさ

か、印鑑のこと

かしらと、私が

躊躇している

と、しゅんは私に顔を向けてきた。私は「はんこ？」と

とっさに返してしまった。すると私に向けていた顔を下

に向けて「べったん」と独り言のように言っていて飛び降り

の順番に並んだ。どうやら印鑑という解釈は外れてはい

なかつたらしい。ということは、しゅんは、自分が飛び

降りるその感覚から「はんこ」を押すイメージが浮か

び、言葉で表現し、近くにいる大人である私とそのイ



メージを共有したかったということなのか。

あれこれ考える間もなく、次に飛び降りたもみじは、降りたままの場所にとどまって、明らかに私に向かつてポーズをとっている。私はあわてて同じポーズをして返す。もみじも、満足そうにしゅんの後ろに並ぶ。かえでは、しゅんが私とイメージを共有したのをちゃんと見ていたのだ。でも、しゅんと同じ「はんこ」のイメージというわけではなく、言葉でもなく、ポーズであるところが面白い。続いて飛び降りたえまは、飛び降りると、ずれてきていたマットを几帳面に台に寄せる。私が声をかけようか迷っていると、私の顔をにこにこに見る。

「ちゃんとしてくれたから、危なくなかったね」というと、もつとにこにこして、小走りに列につく。えまもまた、しゅんともみじが、私とイメージを交わしたのを見ていたらしい。

えまがもみじの後ろについた時、もみじが、並んでいるその位置から、「並んでるの」と私に言う。すると、自分の番になって飛び降りようとしていたしゅんも「並んでるの」と言い、えまもすかさず「並んでるの」と言

う。三人は、同じこと言っちゃった、というように顔を見合わせて笑う。私が「本当にちゃんと並んでるね」と言うと、また顔を見合わせて笑う。その後は、その楽しい雰囲気には惹かれたのか、またこの飛び降り遊びの列に並ぶ子どもが増え、また一人ひとりのイメージでもくもくと飛び始める。

保育後担任に聞いてみると、この三人はこれまで特に一緒に遊ぶということもなかったらしい。幼稚園の三歳児という集団保育の始まりの時期、子どもたちは、こんなふうな「ひとり」の興味が偶然重なり同じ場を共有したことから、そして、たまたまそこにいた大人とのやり取りが「ひとり」と「ひとり」の間にちいさな糸を結び、その結び目がまたきっかけを生んで、やわらかい若芽のような「みんな」の世界をつくっていた。

ともすると、幼稚園は集団の場なのだからと、大人は、「みんな」の世界の楽しさを伝えたいと思う。しかし、こんなふうな「ひとり」と「みんな」のはざまを漂う時間を味わうことが大切なのだろうと考えさせられるひと時だった。

(東京家政大学)